

学校教育目標		未来に向かい 自ら学び 行動する 三成っ子の育成 ~未来を生きる力を育む~			
a ミッション	小中連携教育を基盤とした確かな学力定着の取組の充実	a ビジョン	危機意識から改善意識そして未来志向 【誠実・愛情・一丸】		

評価計画-A7:Q19				自己評価					学校関係者評価			改善計画			
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	g	h	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案		
					達成値	達成値			度達成	イ	ロ			ハ	
課題を解決し、主体的に学ぶ児童の育成	【学力向上部】 基礎的学力の育成	①授業改善を推進する上で、問題発見・解決の過程を重視する。	国語・算数の単元末テスト85点以上の児童割合	低学年85%	国	78.0%	83.4%	98.1%	B 全体として、前期から改善が見られる。しかし、他の課題も大きく、十分な達成とは、いえない現状である。 国語科では、文章を読み取る機会を増やしたため読解力は向上したが、漢字や言葉や文の組み立て、語彙力に課題があった。特に、修飾語は中学年で学習するが、高学年においても引き続き課題が大きかった。 算数科では、単元によって達成度は異なるが、全体的に計算力が不可欠な単元で課題が大きく見られる。特に、文章題において成立立立てられているが、小数の入った複雑な計算になると間違ひが多かった。また、低学年で学習したときの意味（〇のいくつ）から、中高学年の何れという層への移行ができていないため、正しく演算決定ができていないかった。	3			・単元テストからの結果ではB評価となっているが、次年度はそれを基に指導者の授業改善をどのように推進していくかを検討する必要がある。 ・読解力が向上していることは国語力として大切なことである。継続した取組を願っている。 ・学年による格差が気になる。 ・低学年の理解が、中高学年になって顕著に現れる。引き続き低学年の学力向上に力を注いでほしい。	国語科では、漢字の確かな定着のため、小テストを定期的に行うとともに、言葉や文の組み立てについては、授業だけでなく、家庭学習で繰り返し練習を行っていく。読解力については、正しく言葉を使えるように、意味図へを行う。短作作りやすさなどの工夫をする。 算数科では、計算力の向上のためにドリルタイムで計算チャレンジを行っている。高学年ではより複雑な計算に短期でできるように、計算チャレンジの内容を難しく、課題からポイントを取ったものにしていく。また、教員の関係を正しく理解し、演算決定できるようにするために、図の必然性を感じる授業作りを行い、問題をイメージできるようにする。	
			国語・算数の単元末テスト80点以上の児童割合	高学年80%	国	57.8%	91.1%	113.9%							・継続的な取組の成果が出ているように見える。今後も学習意欲を持たせながら継続して取り組むことが大切である。 ・達成感を得られるように、継続的に踏まえる原因を明らかにし、克服に取組んでほしい。
			計算チャレンジの目標達成した児童の割合	60.0%		9.7%	58.6%	97.7%							B 1年は繰り上がり繰り下がり計算になったため数値が下がっているが、10までの計算は身に付いてきている。高学年では、継続して取り組んでいるが、あまりのあるわり算について、あまりを計算するとき時間がかかるため目標の時間を達成できていない傾向がある。
規範意識をもち、自己決定できる児童の育成	【心つくり部】 規範意識や相手意識の醸成	【思いやりあふれる学級り】 ①教師が模範となり率先して挨拶を行う。 ①挨拶をすることの良さを児童に繰り返し伝えていく。	①教師の見取りによる、気持ちのよい挨拶が実行できた児童の割合	80%		61.3%	68.2%	85.3%	B 2学期の達成値としては、11月が62.4%と一番低かった。生活目標で「気持ちのよいあいさつをしよう」の取組みの期には、67.5%と他の月に比べて多少数値の低減とっている。しかし、全体的に数値が低い点や、1学期と比べてもあまり改善されていない点に課題がみられる。また、学年が上がるにつれて数値が下がっている傾向がある。	3		・指導者自身「気持ちのよい挨拶」とは何か、具体化し明確にする必要がある。教師の見取り格差解消に繋がり、さらには、児童への積極的な指導体制の確立に繋がる。考える。 ・気持ちのよい挨拶は、周りの人を気持ちよくすることに繋がる。みんなでできるように取組を進めてほしい。	「気持ちのよいあいさつ」の定義として、「自ら進んで挨拶をする」と子供達に説明した。具体的な姿を示したことで、子供達が以前に比べて進んで挨拶をするようになってきた。引き続き挨拶の重要性を子供達に伝えていく。		
			②児童アンケート「きまりを守れた」の項目に肯定的に答えた児童の割合	80%	86.9%	81.1%	101.4%	A 1学期には教師の見取りより、達成値が高く感じることがあった。そのため、2学期からは、どのような姿が「きまりを守れた」姿なのか視点を与えて児童に自己評価させるように心がけた。その結果1学期よりも達成値は6.3%低くなった。	3 ・「きまりが守れた」についても、具体化し明確にする必要がある。 ・児童が自己評価するという取組は、手間がかかる取組ではあるが、児童の思いを理解するために大切なことである。	教師の見取りと児童の自己評価の数値が近づく必要がある。アンケート実施の際に、心つくり部の取組の「せいけんチェック」や児童会のきまりに関する取組等の様子を想起させながら行ったことで、より深く自分のことを振り返ることが出来た。きまりの大切さや意義についても今後も繰り返し説明していく必要がある。					
			【児童の主体的活動】 ①毎月1回「教室からっぽデー」を設定し、学級活動を活用して外遊びの内容を考えたたり、振り返りをさせたりする。	①教師の見取りによる、設定した「教室からっぽデー」に、外遊びをした児童の割合	90%	92.7%	98.5%	109.4%	A 児童会や各学級の学級委員等による主体的活動により、みんなが外遊びをしようとする意識の高まりが感じられる。学級によっては、毎月1回以上「教室からっぽデー」を設定している学級もある。全員が参加できそうな遊び選び、全員が楽しめるような遊びのルール作りについて学級で話し合うことが必要である。	3 ・学級間の意識の格差について、気になるが、意識の高まりが見られることは、素晴らしいことである。 ・児童会が主体となった活動に先生方が参加している取組はとても良い。全員参加できるように工夫していることは、これからも大切にしたい。 ・難しい課題である全員遊びを、児童が自ら模索し、取組に付けていることが、素晴らしい。	引き続き、「教室からっぽデー」の取組を継続していく。また、児童会主導の「たてわり班遊び」や「ジャンボ履体験」を実施し、同学年とも異学年とも一緒に体を動かす楽しさを味わうことができていくようにしていく。				
【教員の指導による活動】 ②運動習慣（がんばりカードや外遊び状況をもとに）についての学級指導を適宜行う。（第4火曜日の学級朝会など）	②児童アンケート「運動が好き」と肯定的に答えた児童の割合	80%	87.0%	88.9%	111.1%	A 「運動が好き」と肯定的に答える児童の割合が11月は80.3%と一番低く、12月は88.7%と一番高かった結果であった。アンケートを取った時期によって、数値が変化しているが目標の80%を超える結果となった。「教室からっぽデー」の取組や体育科指導、学級での取組（がんばりカード）などの成果が出ていると考える。	3 ・取組の成果が見られる。今後も引き続き、継続した取組をお願いしたい。 ・全員の思いが反映されていることが良いと感じた。	引き続き、運動習慣「がんばりカード」や外遊び状況をもとに）についての学級指導を継続し、「できる」「楽しい」を実感できるようにしていく。体育朝会では、年間を通して、短縄跳びや大縄跳び大会等、計画的に実施する。また休養時間を使って、児童が全員楽しめるようなダンス対抗ドッジボール大会やドッジボール大会も計画し実施していく。							
心身共に健康な児童の育成	【体つくり部】 運動の楽しさを実感し、自ら進んで体を動かそうとする児童の育成	【児童の主体的活動】 ①毎月1回「教室からっぽデー」を設定し、学級活動を活用して外遊びの内容を考えたたり、振り返りをさせたりする。	①教育内容の質の向上と内容の精選を行い、「働き方改革」を進め、時間と心のゆとりを生む。計画的・実態に応じて研修を行い、不祥事防止を図る。	①教職員アンケート「自分の職務に充実感をもっている」の肯定的評価の割合	80%	100.0%	94.7%	125.0%	A 日々生起する事案に対し、即座に、組織的に重点を置き、現場向きで明確な優先順位として取組をすすめてきた。また、日々の生活の中で児童の姿容を察知し、成果を職員全体で共有するよう努めた。しかしながら、職員半数以上が残業時間4～5時間を超える実態があり、業務改善に向けた見直しが必要と捉えている。	3 ・現在の与えられた環境下での時間外労働の継続は難しい取組ですが、業務改善・工夫を努めていきたいと思う。 ・教職員としてのやりがいを感じている職員が多くいるように思われ、学校経営が上手にできている成果と考える。 ・休業時間の多さが心身の疲労に繋がらないことを願う。 ・教職員の職務に対するやりがいの高さに感心する。	現状を把握し、優先事項を考慮、無理のない持続可能な計画を立てられるよう、主任主事との連携を行いながら継続して取組を進める。 また、日々の生活の中で児童の姿容を察知し、成果を共有し、課題に対して、早期に手立てを講じるなど、チーム意識を高め、一人一人の役割や達成感を得られるような取組を進める。				
			②教職員による学校たよりやHP、コドモン等を通じて情報発信を行い、保護者の満足度を高める。	②保護者アンケート「安心して子供を学校に通わせている」の肯定的評価の割合	90%	87.8%	94.6%	105.0%	A 生起する事案に対し、早期対応・遅滞のない保護者連携を確実に行うことが保護者評価に大きな成果を得ている要因と捉えている。しかしながら、「いじめがあるか否か分からない」と応える保護者も多いことが課題と捉えている。	3 ・「いじめがあるか否か・・・」は保護者として当然気になることだが、その不安をいかに払拭していくのが大事であり、具体的な取組内容を積極的に発信していく。 ・早期対応や連携を大切にすると同時にこれからも継続してほしい。 ・保護者は、我が子について、学校と共有できているという思いを持って安心できる。	児童や保護者の思いに寄り添い、常に迅速で組織的な対応を行う。日々気になることを連絡し連携したり、課題のみならず、集団として、または個人としての成長や頑張りを保護者に伝えていくことに取り組み。				

【自己評価 評価】  
A: 100≦(目標達成)  
B: 80≦(ほぼ達成) < 100  
C: 60≦(もう少し) < 80  
D: (できていない) < 60

【外部評価】 イ: 自己評価は適正である。 ロ: 自己評価は適正でない。 ハ: わからない